

# 多摩デポ通信 第18号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2011年5月5日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP / <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail [depo\\_tama@yahoo.co.jp](mailto:depo_tama@yahoo.co.jp)

3月11日は私たちにとつて忘れられない日となりました。多くの人が地震と津波によって尊い命を奪われ、いまなお行方不明の人がいます。図書館も壊滅的な被害を受けたり、跡形もなくなつたところがあります。

しかし、この大震災に打ちのめされながらも、被災地は復興に向け動き始めています。大船渡市立図書館では、図書館が避難所となり、図書館員は被災者のケアにあたっていました。図書館が入るリアスホールのガラス壁面には、「津波なんかじゃ、負けないぞ!!」と大書されていました。被災

地の人たちの気概を感じる  
とともに一日も早い復興を  
願わずにいられません。

多摩デポは4回目の総会を迎えます。資料を末永く活用する保存システムを提案する私たちに、一瞬にして崩壊してしまった図書館の姿は、遣り切れない思いと教訓も与えてくれました。亡くなられた図書館員の方々のためにも、先人の知的財産を残し、次代に伝えていく仕組みづくりを再構築する必要があると思います。総会では、災害から資料を残す方法や多摩デポでできる支援についても考えたいと思います。

## 2011 年度通常総会に集まろう！

NPO 法人多摩デポ 4年目に突入

日時：5月29日(日) 午後2時～4時30分

会場：国分寺労政会館第一会議室 (地下1F)

JR 国分寺駅南口5分 旧勤労福祉会館 電話：042-323-8515

記念講演：津野 海太郎 氏

(和光大学名誉教授)

演題：「図書館の電子化と無料原則」

(講演だけの参加可・無料)

—講演後、大震災被災地支援活動について報告と討議を行います—

- 13:30 開場、受付開始
- 14:00～15:00 通常総会
- 15:00～15:10 休憩
- 15:10～16:30 記念講演・報告と討議
- 17:00～19:00 場を移し懇親会

## 今、共同保存図書館を

考える

理事長 座間直壯

この度の東日本大震災で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。私たちの活動と大きく関わりのある現地の図書館も多くが被害にあっています。先日の理事会で日本図書館協会の行う支援活動に参加した理事の一人から現地の状況について報告がありました。支援活動を始めるための準備として現地に赴いたので、最初飛び込んだのですが、最初の光景にことばが出なかつたという。

いま、私たちに何が出来るだろう。みんなそんな思いで日々報道されるメディアに目や耳を傾けていることと思います。多摩デポでも何か出来ることを考えよう、多摩デポで出来ること、多摩デポだから出来ること

を、理事会で検討しようとなりました。その中から、まだ具体的ではありませんが「多摩デポ震災復興支援プロジェクト」を立ち上げ、多摩地域の各図書館等で所有(未受入れ資料も含む)する図書資料を再検討し、提供できるものがあれば提供出来る仕組みを作り、被災された図書館がコレクションの再構築をするときに役立ててもらおうことが出来なにか検討したいとの意見が出ました。

これには様々な課題もあります。第一に場所の確保、次いで人手の確保、搬送手段、現地との連携など山ほどありますが、じつと手を拱いているわけにはいきません。いろいろな分野の方々と手を取り合いながら出来ることから始めていきたいと考えています。

今年、第97回全国図書館大会が多摩地域を中心に

開催されます。以前多摩を会場に全国大会が開催されたのは1988年で23年前のことです。多摩地域の図書館は1960年代後半から70年代、そして80年代と当時の図書館界の牽引的役割を果たしてきたと思っています。「市民の図書館」

(日本図書館協会刊)が1970年に発刊され、40年が経過しています。多摩地域の図書館の根底に流れている思想はこの「市民の図書館」そのものなのです。求める利用者に求める資料を確実に提供する。そして住民の身近なところに拠点をつくり誰でも利用できる仕組みを確立することを徹底して進めてきました。

そんな地域での図書館大会を地元の図書館をはじめ多摩地域400万人の住民の方々と共に成功させたいと考えています。

我がNPO法人共同保存

図書館・多摩も資料保存の分科会に参加し、活動状況の報告とあわせて、震災復興プロジェクトへの参加の呼びかけをしていきたいと考えています。

都立多摩図書館の移転問題や共同保存システムの構築など4年目を迎える多摩デポには多くの課題が山積していますが、確実な歩みを進めていきたいと考えています。支援をよろしくお願ひします。



## 立川市一冊本横断検索 ボランティア作業終了

2009年度に日野市で行った事業に続いて10年度は立川市からの横断検索依頼を受け、11年1月～3月にかけて作業を実施した。

今回の検索対象は、立川市で最後の一冊となった資料のうち、経済関係（分類番号330～339）の資料約6500件、そのうちISBNがあるものは約5500件である。ISBNなしの資料には出版年や頁数、大きさなど書誌事項がはいつていないデータも半数近くあり、どの程度同定できるか不安もあつたが、なんとか年度内にほぼ作業を終えることができた。

結果は立川市のみ所蔵、立川以外に一自治体所蔵、三自治体以上所蔵を分けて、その比率など大まかな統計は出ている。今回は一冊本

のうち、事前に図書館側で残すものを決定した「除籍対象資料」ではなく、検索結果を参考に立川市が今後の保存・除籍を考える「自治体最後の一冊」を対象にしたもので、どちらがより効率的か、図書館側の作業量はどうか、なども今後検討する必要がある。さらにこの結果を多摩地域全体のものとしてどう生かしていくかも課題である。

共同保存図書館が実現するまでの間、多摩地域最後の一冊、あるいは二冊となった資料をどう残していくか、多摩全体の問題として検討していく場が必要なのではないだろうか。

実際に作業するにあたって、10年9月から『多摩デポ通信』紙上でボランティア募集を開始し、事務局からの依頼も含め最終的には15人の方に協力していただくことができた。

中でも図書館総合展ポスターセッションや多摩デポ講座で興味を持った学生さんが作業に加わってくれたことは、とてもうれしいことだった。今回は希望に応じて一単位二〇〇件、一〇〇件、五〇件など割合きめ細かく対応できたのもよかったと思う。中にはすごい勢いで二〇〇件を次々にクリアして下さるツワモノもいらしたが、それぞれができる範囲で参加し、ボランティアの皆さんの力で終了できたことに感謝したい。

今回の作業は終了したが、既にもう何人かから、今度やるときはぜひ声をかけて、というお申し出が届いている。自宅で横断検索ができる環境さえあれば誰にもできる作業で、一人一人の件数が集まれば何千件にも積み上がる。ボランティアの輪を広げて、11年度もぜひこの事業を継続し、多摩全

体での資料保存の動きにつなげられるよう努力したい。そろそろ作業の終わりが見えてきた3月11日、あの大地震が発生。横断検索がつかまらない！こんなところにも影響が……。いつも同様に検索できた図書館、直後の二・三日はできなかったのその後しばらくつながらなくなつた図書館、「いつできるようになるか今のところわかりません」という図書館、「計画停電実施期間中はHPのすべての機能が使えません」という図書館、対応は様々であつた。結局、たまたまシステム入替え休館と重なつたところも含め、3月中は検索できない自治体が幾つか残り、41件ほど4月に持ち越した。副次的なことではあるが、こうした災害時の図書館の対応、市民への広報のあり方など、興味深かつた。

（事務局 田中）

## 立川市一冊本横断検索 作業をやったの感想

東京外国語大学

田村 祐子

初めは作業に時間がかかっていましたが、回数を重ねるごとに効率も良くなり楽しく作業を進めることができました。

ほんの十年ほど前に出版された本の中にも立川のみあるいは立川と他の一自治体にしか残っていない資料が多くあることを知り、とても驚きました。私が担当したのは会計や会社経営に関する図書でしたが、こうした分野の図書も時間が経てば、当時の時代背景や状況を知るための貴重な資料になります。この現状を目の当たりにして、改めて資料保存の重要性を感じました。国立国会図書館には納本制度がありますが、地域

の公共図書館が連携して行うこうした取り組みも、迅速に地域の利用者の要求に対応できるという点で、非常に意義のあることだと思います。

一つでも多くの資料を次の世代へと受け継ぐために、今後この取組みが続いていくことを願っています。

来年度もこの取組みが続き、人手が足りないようであれば、ご連絡ください。



## 東京都立多摩図書館 移転計画発表！

東京都教育委員会は、2011年1月27日付けで東京都立多摩図書館の国分寺市への移転計画「都立多摩図書館の施設整備について」を発表しました。

それによると、敷地面積…七、〇〇〇㎡、延床面積…約九、〇〇〇㎡、建築面積…約三、二〇〇㎡、閉架書庫…四、〇〇〇㎡となっています。収蔵スペースについては、「中長期的に都立図書館に必要な収蔵能力を備えた収蔵庫を設置」とされており、それがどのような規模と内容になるのか、多摩デポとしても重大な関心を持たざるを得ません。

一方、「移転改築によるサービスマス向上」の第一に「開架閲覧スペースの拡大・充実」があげられ、協力事業については触れられていな

いことなど、多摩地域への都立図書館としてのサービスマスの全容が見えるものにはなっていない。

平成23年度から24年度にかけて基本設計し、24年・25年度で実施設計して28年3月には移転予定というスケジュールにもかかわらず、多摩地域の図書館や市町村に対してもホームページでの広報以上の情報は伝えられておらず、詳細は未だ不明確です。

現在の多摩図書館ができる時の館長協議会と都立図書館との関わりを思い起こすと、これからの都立図書館が地域の図書館へのサービスマスからますます来館者中心に変わっていくのではとの危惧を禁じ得ません。

そこで多摩デポとしては東京都に対し、質問書を提出することになりました。質問書全文は挟み込みの別紙をごらんください。

## 東日本大震災と 多摩地域の図書館

3月11日の地震によって、多摩地域の図書館も施設・設備への被害や運営への影響が生じました。その中から、町田市、調布市、多摩市の市立図書館と、たましん地域文化財団歴史資料室の様子をレポートしてもらいました。

### 地震と図書館

町田市立

さるびあ図書館

手嶋孝典

移動図書館車（BM）で午後の2か所目のサービス・ステーションに行くために休憩していた時に、地震に遭遇した。このコースは、さるびあ図書館を基地として2台のBMがここで合流して、次のサービ

ス・ステーションに向かうことになっている。

突然、地面がぐらぐら揺れて、私は船酔い状態になってしまった。BMもひっくり返るのではないかと思うほど、激しく揺れていた。

サービス・ステーションでは、ラジオで地震速報を流しながら、通常通り貸出しをしたが、お客さんは極端に少なかった。それもそのはず、ここは高層マンションだったからだ。エレベーターが停止しているため、高層階の住人は降りてくる人は少ないし、余震が続く中を小学校に迎えに行ったりするお母さんも多かった。さるびあ図書館に戻る途中、停電している場所とそうでない場所を通過し、奇妙な感覚を味わった。堺図書館のBMは、交通渋滞に巻き込まれてしまい、帰館が相当遅れたそうだ。

無事帰館すると、幸いな

ことに、さるびあ図書館は、壁等に亀裂が入ったものの、大きな被害はなかったようなのでホッとした。しかし、地震発生後、全館が休館しているという聞いて驚いてしまった。

中央図書館は、ビルの4階と6階にあるためか、書架から本が多数落下した。特に書庫（6階）は、本が散乱しているひどい状態だった。その日は、停電と断水が午後11時まで続いたとのことである。他の地域図書館は、壁等の亀裂やタイルの剥離以外に大きな被害がなかった。

翌12日は、地域図書館は、平常どおり開館したが、中央図書館は、館内整理のために臨時休館を余儀なくされた。13日からは全館開館したものの、夜間開館は4月15日まで見合わせざるを得なかった。BMは、燃料不足を理由に3月15日から

18日まで4日間の運休を強いられた。

震災後、周辺の図書館が軒並み休館していると聞き及んだ。誤解を恐れずに言えば、図書館は行政内部では、不要不急の施設に位置付けられており、それに対して、市民・利用者の反発も余りないことが寂しい。

さるびあ図書館では、震災直後に地震関連の特集コーナーを設けたところ、大いに利用された。原発関係の資料も利用されたが、特集コーナーを設けるほどには蔵書が少ないのは、地域図書館の限界であろう。ともあれ、図書館は非常時にあっても開館していることによって、その役割を果たすことができるのだ。



## 地震その時そしてその後

元調布市立図書館

吉田 光美

3月11日の地震当日、最も被害があつたのは中央図書館でした。12階建ての文化会館の4・5階部分、一般室で千冊強の本が書架から落下、数か所で書架の天板・棚板が外れました。しかし揺れと同時に書架から離れるよう来館者に呼びかけ、全員無事に避難することができました。地下書庫や視聴覚室等のある6階では資料落下はありませんでしたが、壁面にひび割れが生じましたし、文化会館全体ではエントランスホール

の壁面剥離など各所に影響が出、その後の点検・補修のための休館につながりました。分館は平屋や2階建ての古い建物ですが、順次耐震工事をしていたこともあり、空調、電灯等のずれ、

書架と壁のずれ等はあつたものの、目立つほどの被害はありませんでした。

けれども地震後には計画停電による臨時休館（中央図書館は複合施設内にあることもあつて施設全体との調整が必要なため1週間ほど休館しました。分館は閲覧のみですが開館を行いました）、コンピュータによる貸出経験がない職員が増え、コンピュータが止まった時の対応が課題です。日々変わる不規則な開館時間、節電のための夜間開館休止等により、段階的に平常に戻るまでの約1か月間、全館で利用者にご不便をおかけすることとなりました。

計画停電時には、電算システムサーバのある中央図書館が対象地域に入ると、データ保護のため停電時間の前後1〜2時間を含めて電算システムの稼働ができ

なくなり、全館的にコンピュータでの貸出・返却・予約等ができませんでした。図書館ホームページでの広報もできなくなりました。また中央図書館では、書庫の電動書架部分が動かず、エレベーターによる出納も不能、市内各館を結ぶ搬送便は到着階の地下から上階への100箱近い資料の搬送が困難になる、電話・FAX・Eメール等での通信も不能、暖房等空調は動かず、照明（窓のない階段等は昼でも真っ暗）無し、水も出ずトイレ使用不可など、通常時には思いもよらぬ事態に直面したのです。また休館により、各所に大量の資料の停滞・滞貨が生じ、「物」としての本に圧倒された日々でした。

また、市役所・教育委員会、複合施設内の各部署（特に施設管理部門）との連絡調整、電算システム管理、

広報業務に多大な時間を割く必要がありました。この他、交通状況や燃料不足による資料搬送、用紙不足による出版状況等に心配をした時期もありました。労働・雇用の面では、地震後は帰宅困難者の発生、交通不安定な状況下での出勤可能者の把握と確保、夜間開館休止中の夜間勤務専門嘱託員の自宅待機（無給）状態の発生などの問題が生じました。

図書館は資料提供が大切とされながら、その目標とするところが何かを考え、資料提供の手段を考える必要があると思います。これから夏に向けて、急な停電等の事態に備えるとともに、節電が求められる中、情報提供機能を維持しながらどのようにサービスを構築していくけばよいか、改めて議論が必要であると感じています。

## 地震後の混乱と図書館

多摩市立永山図書館

阿部 明美

地震の直後、揺れを感じた嘱託職員がいち早くバックヤードからフロアに飛び出し「書架から離れてください」と利用者に声をかけた。最初1、2冊バラバラと落ちていた本は、揺れが増幅する中で雪崩のように落ち始め、最終的には高書架、低書架とも複式書架は7割（「いや8割だ」という声もある）落下した。落ちた本は通路に小山をつくり怪我人が出なかったことが不思議なくらいだった。初動で避難を呼びかけたことが幸いしたと思っている。

揺れしている様子に、これはただ事ではないと思いき急いで駆け付けたのは、平成20年に旧中学校に移転した本館だった。だが、寄せ集めの書架を後付けで設置した本館では3・4階の書庫の一部の部屋を除いては大きな落下はなく、むしろ永山が大変らしいという話を聞かされた。永山に到着したのは地震からおよそ30分くらいたってからだったと思う。かけつけたところで前述した様子を目の当たりにしたのだが、館内には誰もいなかった。職員も利用者も、同じ複合施設内の市占有部分全体の施設管理を担当している公民館からの指示で、隣接の公園に屋外避難していたのだった。ただ利用者のほとんどはそれぞれ判断で帰宅し、公園に避難した市民は居合わせたボランティアだったということだった。

市では直ちに災害対策本部を設置し、非常配備体制が敷かれ、職員はそれぞれの職場に参集、待機することになった。さらに永山公民館がほどなく帰宅困難者のための一時避難所になったことを受け、図書館の職員も避難所設営、運営（受付事務、毛布等物資の配布のほか駅前立つての案内、誘導など）を担った。職員自身も何人かは帰宅困難者だったのだが。

多摩市では永山図書館以外の館では地震による全面的な被害は見られなかったが、多摩市は続く土日の二日間全館休館し、全体の両日勤務予定の職員、嘱託職員を中心に永山図書館の復旧に全力を注いだ。永山では建物被害としては書架の落下の他、天井の空調設備の枠の落下、壁の亀裂10か所以上、自働ドアのゆがみなどを確認した。壁付き書架も2〜3割程度は落下した。特にCDや文庫用の奥行きのない棚の落下は著しかった。側板上部に2センチ程度隙間ができた棚があった。後日わかったのだが、これは数年前の震度4の地震でわずかに発生していたものが今回の地震で大きく広がったものである。児童コーナーの棚にほとんど落下がなかったのは、ほとんどが低書架である上に、背が見やすいようわずかがだが奥に傾斜があったことが大きく働いたと思われる。

図書館に限っての地震対応は今後の反省材料として活かすことができるが、今回強く感じているのは、未曾有の大震災、それに続く原発事故とその影響のような広域的災害に対しての危機管理の問題に対して図書館が果たすべき役割である。多摩市では、当初2日間の予定で休館し、3月14日

に部分的に開館したが、計画停電という事態が発生し、翌15日から3月22日まで休館した。さらにそれが3月31日まで延長された。一方で永山公民館が3月19日から3月末まで震災関係避難者の一時避難所になり、永山図書館は組織的に永山公民館下に組み込まれ協力した。永山図書館以外の図書館でも災害に関する市民からの電話問合せに応えるヘルプデスク応援や乳幼児への飲料水の配布、登下校の児童の見守りなど、市民の「安全」や「安心」のための行政としての責任を果たすことを優先した。もちろん市災害対策本部の判断、決定に、行政組織の一つとして従ったのだが、そのように記すことは責任逃れのように聞こえるかもしれない。もちろん伝えるべき図書館の意見は伝えるべき場所ではあるが、

このような長期の休館は多摩地域にもあまり例がなかったと思うが、市民からの苦情だけでなく、内部の混乱、困惑も含めて未だに総括できずにいる。「このような災害時だからこそ、情報提供機関としての責任を果たさなければならぬ」という強い思いを抱いたのは私だけではないはずだが、開館後に地震災害、原発事故に関する本の展示を行ったものの、たとえばブックリスト、パズファインダーのような積極的な情報提供はできなかった。休館期間に準備ができたはずではなかったかと反省している。

このように長期の休館は多摩地域にもあまり例がなかったと思うが、市民からの苦情だけでなく、内部の混乱、困惑も含めて未だに総括できずにいる。「このような災害時だからこそ、情報提供機関としての責任を果たさなければならぬ」という強い思いを抱いたのは私だけではないはずだが、開館後に地震災害、原発事故に関する本の展示を行ったものの、たとえばブックリスト、パズファインダーのような積極的な情報提供はできなかった。休館期間に準備ができたはずではなかったかと反省している。

このように長期の休館は多摩地域にもあまり例がなかったと思うが、市民からの苦情だけでなく、内部の混乱、困惑も含めて未だに総括できずにいる。「このような災害時だからこそ、情報提供機関としての責任を果たさなければならぬ」という強い思いを抱いたのは私だけではないはずだが、開館後に地震災害、原発事故に関する本の展示を行ったものの、たとえばブックリスト、パズファインダーのような積極的な情報提供はできなかった。休館期間に準備ができたはずではなかったかと反省している。



たましん地域文化財団  
歴史資料室(国立)  
被害状況について

保坂 一房

国立駅南口前のビルにある、たましん地域文化財団歴史資料室で、3月11日の地震による資料の落下冊数はおよそ220冊ほどでした。被害状況の写真を添付します。いちばん本が落下したところですが、



## 「緊急討議東日本大震災 被災支援とMLAK」 集会参加報告

書架の最上段からの落下は、ブックキーパー（平成16年度最上段のみ設置50セット約15万円）が作動してほとんど防げました。しかしブックキーパーを設置していなかったところ、棚の種別案内の表示板が邪魔をしたところは、落下してしまいました。まずは報告まで。

4月23日に「緊急討議東日本大震災 被災支援とMLAK」に行ってきました。博物館、図書館、文書館、公民館が連携して東日本大震災の被災情報を集め救援に当たろうという活動です。L・図書館に関しては図書館協会の活動が報告されましたが、M・博物館、A・文書館、K・公民館についても、まずは被災地情報を集め、手探り状態ながら活動を始めている様子を知ることができました。当日資料は [save MLAK のサイト](http://save MLAK のサイト) <http://savemlak.jp/wiki/SaveMLAK> で見ることができます。ご覧ください。

この集會に参加し、それぞれの報告を聞きながらいろいろなことを考えました。

資料保存に関しては、SAVE MUSEUMの網羅的なミュージアムリスト作成の取り組みや文化庁の文化財レスキュー事業に、図書館関係者も学ぶべきところがあると思いました。ミュージアムリストでは、『全国博物館総覧』にも収録されていないところも含め施設調査を行っています。各ジャンルの学協会やインターネットミュージアムと直接連絡をとりながら、幅広い情報収集を行い、支援すべきところや事を見出すと努力しています。文化財レスキューでは、国や地方の文化財指定の有無を問わず、社寺や個人のものも含め、緊急に保全を必要とするものの救出や応急処置、周辺施設での一時保存を開始しています。ひるがえって図書館では、公立図書館や大学図書館、学校図書館は日本図書館協会でも情報

収集に努めていますし、また各図書館同士も連絡を取り合うことが可能なのではないかと思われませんが、民間資料室や文庫等の状況は、どこかで情報把握ができているのでしょうか？元々組織やネットワークがはつきりあるところだけではなく、単独で活動していた類縁機関についても情報把握や支援について考えなくてはならないのではないかと？そういうところほど、人手も足りず支援も得にくい状況で先の見通がたないでいるかもしれない。まずは状況把握、そしてできるところ、優先度の高いところから取り組むことが必要ではないかと思えます。

また討議の場で会場から被災地の過去・現在・未来のマップづくりに取り組んでいる民間の活動例が紹介されましたが、図書館でも今回の被災状況も歴史の一

段階として、記録に残す活動が必要ではないかと思ひます。まだ現地では日常の活動を取り戻すこと、今後の復興に必死な段階ではありませんが、未曾有の混乱の渦中にあるだけに、毎日必死に頑張つて復興して、後で気づいたらその間の記録が残っていないかつたということにもなりかねません。

目の前の事で手一杯な中でも、各地域において今の日々の記録を残し、次の世代に引き継いでいくためには、どこで誰が何をしたらよいか。各地域の新聞社等報道機関等も被災していませんが、中央のマスコミの記事が記録の大半だったというようにはならないようにしていきたい。当面現地の公立図書館で、少なくとも行政資料(通常の形ではないことが多いと思われるけれど)や行政の記録を確実に収集・保存しておくこと

に取り組めないものでしょうか。さらには民間の資料や被災者の声を図書館資料として残していく取り組みはできないものでしょうか。一枚ものの資料まで含めての資料収集、手記・文集の編集、聞き書きの作成なども考えられます。そして遠隔地からは、そういった取り組みについて、どうしたら上手に支援していくことができるのか。

また、公立図書館の被災資料については、すでに提案されている遠隔地からの資料の寄贈や除籍資料の提供が有効な部分は、現地の要請に基づいて徐々に取り組んでいけばよいと思ひますが、他にもできることがあるのではないのでしょうか。特に地域資料に関して、所蔵資料が失われてしまった場合は、著作権法31条3号の保存のための複製で、周辺の

所蔵館資料をもとに複製を作成、製本して提供する。その費用や作業については遠隔地からの支援もありうるのではないか。これまで所蔵できていなかった地域資料も、必要なものがあれば、自治体刊行物については、各自自治体が在庫を提供しあつたり、著作権の問題は申し合わせを交わす等して全体の複製を認めて提供し、地域・ふるさとの根っこを絶やさないようにできるとよいと思ひます。さらに地域資料のうち現地の地方出版物については、出版社も被災している中ではあるけれど在庫が無事ならば、国から資金を得るなどして各図書館が必要なものを必要な部数を出版社から買い上げる、民間の寄付金で購入するなど、地域文化の火を消さない努力ができると思います。この際、一定の部数がそろえば、稀少な品切れ本

を重版できたりしないでしょうか? 図書館としては、博物館・文書館・公民館との連携の他に、出版社ともよい関係を作つていけるとよいと考えます。

さらに将来に向けては、地域ごとの震災の記録の作成や保存だけで終えることなく、それらをもとに『東日本大震災記録集』といった全体を俯瞰できる記録集が残せるとよい。未永く各地の図書館で所蔵すべき資料になると思われます。こういうことを行政、研究者、出版社、編集者が手を組んでやれないものでしょうか。日本図書館協会の支援活動で現地を見た人からも現地情報を教えていただきながら、今後どのような取り組みをしたらよいのか、考えていきたいと思ひます。多摩デポでも、どのような取り組み、支援ができるか探つていきます。

## 図書館の書庫事情

(事務局 吉田)

多摩地域の図書館の書庫を巡るコーナー、今回は町田市立中央図書館の書庫を紹介していただきました。

### 町田市立中央図書館の 書庫事情

町田市立中央図書館

吉岡 一憲

町田市立中央図書館が開館したのは1990年11月、開館から既に20年を経たこととなります。開館当初は、駅前の大規模な図書館であること(総面積5262㎡)、また、ホテルと同居のビル内にあることなどで注目を浴びました。具体的には、14階建てビルの4・5・6階部分が図書館なのですが、この中で、書庫は6階の事務室の奥にあります。面積は約472㎡、最大収容冊

数は、開架スペースの16万冊に対して24万冊とされています(実際にはもっと沢山入っています)。さらに、書庫の奥には、約30㎡の貴重書庫があり、古い地域資料(特にモノ資料)などが収められています(最近は物置と化している感がありますが)。

中央図書館開館の際には、資料費が潤沢にあったため、図書を大量に購入することができました。そのこと自体は大変喜ばしいことだったのですが、開館時点で開架書庫に入りきららず、泣く泣く書庫に入れてしまった図書も相当数ありました(例えば教師向けに書かれた教育関係の図書など)。それらの資料は、「一度も借りられないまま除籍されてしまっているのではないか」などと冗談で言っていたのですが、その後、利用が増えるのに応じて書庫から開架書架へ

と補充したので、流石にそのようなことはなかったと思います。

そんなわが館の書庫に収められている図書には、多分他では見られない、ちょっとした特色があります。それは、付箋紙くらいの大さきの色の付いたしおりが、外から見えるような形で図書に挟みこまれているということです。これは、1999年度から行っているもので、「99年度―薄緑、00年度―水色、01年度―ピンク」といった形で年度によりしおりの色を変えています(さらに2008年度からは具体的な年数がしおりに印刷されています)。請求があった図書については、貸出の際にそのしおりを抜いてしまうことになっているため、「その図書がいつ書庫に入れられたのか」、「いつから利用されているのか」が一目で分かるように

なっています。除籍候補を抜き出す際にこのしおりは大変便利で、作業の省力化に大いに貢献しています。

さて、先に述べたようなことから、わが館の書庫は開館から程なくして飽和状態となつてしまい、現在に至っています。現状では、新刊図書が納品されるとすぐに開架書架が一杯になつてしまうため、利用の少ない図書を急いで書庫に移し、さらに書庫も満杯状態のため急いで除籍作業をするといった状態です。しかし、実際にはそうした作業も追いつかず、図書を満載したブックトラックが書庫内に溢れてしまっていることが多々あります。市内の廃校になつた小学校の空き教室を借り、そこに少しずつ書架を増設して保存スペースを増やすといった涙ぐましい努力もしていますが、それでも増え続ける蔵書の保

存には追いつきません。町田市立図書館にとつて、一定の広さを持つ保存スペースを確保することは、喫緊の課題であると言うことができるでしょう。

【写真は入り口付近から書庫の奥を見たところで、通路左側は奥まで全て電動書架になっています。さらに奥に貴重書庫があります。通路右側は手前が固定書架、その奥が電動書架になっています。】



## 多摩デポブックレット

芳賀啓著 『地図・場所・記憶』——地域資料としての地図をめぐる『紹介』

小平図書館友の会 氏家 和正

### 地域資料としての地図

ごく最近の話だが、県立浦和図書館では明治初期の古地図を閲覧する人が急増え、また今住んでいる土地が昔はどんなだったのかを調べたいという問い合わせも相次いでいるようだ。新聞記事で知った。

このことは地震により久喜市南栗橋地区で起きた液状化現象がきっかけのようで、記事では、明治16年の迅速測図の復刻版を見ると南栗橋地区は水田を示す黄色に塗られた部分が多いとあり、あわせて識者の「地盤は今の住宅地図だけみて

も分からないことが多い。古い地図は昔の地形がわか



り、地盤の参考になる」という言を紹介（読売新聞）4月28日東京朝刊33頁「自分の土地の昔は何？…震災で古地図閲覧急増」。

図書館のもつ地域資料としての地図の使われ方の一端が垣間見られる。

### 紙の地図は地域の「証拠品」

さて『地図・場所・記憶』だが、この本はわずか54頁の小冊子ながら、図書館に引き寄せて、的確に、地図を語っている。その例を一つ挙げてみよう。

『紙の地図は「地域」にとつて最良のそしてもつ

とも基本的な「証拠品」であり、その「証拠品」を、一般市民がいつでも、誰でもあれ閲覧できるように、「その地域図書館において」常に収集し、保存し、公開しておくことは、図書館のもつとも重要な仕事のひとつである』ということです。「証拠品」という言い方に抵抗があるようにしたら、「記憶」といいかえてもよいでしょう。

すなわち、地図は出版されたその時点で当該地域の最新の地形情報を紙に記録したもの（記憶を記録したもの、ドキュメント＝証拠品）で、「地域の記憶」の保存形式は紙の地図が網羅性体系的に優れている。それを図書館で保存し、いつでも「地域資料」として利用できるようにすることが重要である、と著者はいう。そしてデジタル情報は可

変・可塑的で流動性が高いぶんだけ逆に媒体としては不安定である、と。

### 古い地図は大切だ

この本のキーワードは〈地図と記憶〉。地図とは、地形図とは、から説き起こし、地図はふつう最新のものでなければ用をなさないものだが、地域資料としては「ちよつと昔の地図」が実は大切である、たとえば「あのマンションの建っているところ、前はなんだったつけ」というような疑問にこたえられるのは旧版の住宅地図だ、というように。古い地図の価値をわかりやすく伝え、そして古地図の話へと、著者は焦点をしばって深い知識で語ってゆく。

### 図書館は地図を集めている

先に引いた県立浦和図書館には「約二一〇〇冊の古い住宅地図や、地形図五〇

〇枚以上が收藏され」ているようだが、どこの図書館でもその地域の地図をそれなりに集めていることと思う。小平を例にとれば、地形図では二万五〇〇〇分の一「立川」は昭和22年資料修正から最新のものまで、同じく「吉祥寺」も昭和2年修正から、五万分の一「青梅」は明治42年測図、「東京西北部」は明治42年測図の大正10年修正測図から最新のものまで揃っている。地形図に限らず、図書館は住宅地図、道路地図、都市地図、都市圏活断層図など幅広く集めている。

### 図書館員のための地図の話

そのいっぽうで、図書館情報学で地図に触れているのは、教科書を何冊か見たかぎりだが、資料論を扱っているものに数行ないし3ページ程度の説明があるだけ。目録規則に独立の章こ

そ設けられているが、資料組織の教科書ではNCRの条文をなぞるのみだ。

とはいえ、地図について書かれた本はたくさん出ている。この文章を書くために書店でばらばらとページを繰ったのは『地図の読み方事典』『地図もウソをつく』『地図を読む』『地図に訊け!』など。なかなか興味深かったし、図書館員はこういう本を読んで地図の知識を仕入れているのだと思う。

この本は第2回多摩デポ講座で話された「昔の地図を編集し、土地の歴史を読む」の一部を著者がまとめなおしたものが、ようやく図書館員に語りかける地図の本が出来たともいえよう。それは講座で地図が取り上げられたおかげである。多摩デポ講座の過去のテーマをみると、地図にかぎらず、図書館の周辺にも目が

配られていることがうかがえ、企画されている関係者の労も見逃せない。これからも、「紙」「印刷」「古書」……などをテーマとして扱うとよいのかもしれない。

### 大縮尺の地図こそが

話がすこし傍にそれてしまったが、もういちど『地図・場所・記憶』を見てみよう。

著者と地図との最初の出会いがまず語られ、柏書房に在籍していたころの書籍という形での地図出版をふり返る。そして〈場所と記憶〉をテーマに掲げて独り興じた出版社「之潮」を語る。つづいて地形図、古地図、住宅地図などに話題を移し、デジタルデータとしての地図情報への危惧と紙の地図の重要性、古地図には「にせもの」もあると言及、また地域資料としての地図は大縮尺の一万分の一

やヒューマンスケール（五千分の一以上）が優位であり、かつて出版されていた二五〇〇分の一と三千分の一の東京都地形図の重要度に触れていく。そして、

……地域資料であっても中央のどこかにまとまっていればそれでよいという発想は、伊能図と明治初期の地誌資料が一箇所に「召し上げられた」末に、関東大震災で消滅した事例を挙げるまでもなく、間違いです。

あくまでも『地域の資料はまずその地域に』これが基本です。

もちろん地図に限ることではなく書籍も同様だと、最後を締めくくっている。

### 多摩デポブックレット⑤

#### 『図書館のこと、

#### 保存のこと』

#### 総会に合わせ発行

多摩デポの年次総会では、毎回、記念講演を識者をお願いしています。

今回のブックレット No. 5 は、第2回総会での竹内哲氏講演「図書館のこと、保存のこと―図書館の歩む道―」と、第3回総会での梅澤幸平氏講演「図書館の役割と資料保存―滋賀県の場合―」を一冊にしての発行です。

おふたりのお話は、東日本大震災を経験した今、「図書館のミッション」を再確認するのに実に示唆に富んだ内容で、これから図書館の仕事に係わる方たちにも是非お薦めできるものになっています。震災当日、ご自宅の地震

の後始末もそこに刊行の準備にご協力くださった竹内先生に感謝します。発行日は5月28日。ページ数が増えた今号は、特別定価735円（税込）での発売です。29日の総会参加者には当日配布、総会には欠席の会員には後日郵送。

### 小平図書館友の会 チャリティ古本市

日時

●7月9日(土)

10時～17時

●7月10日(日)

10時～15時

会場

小平市中央公民館

小平図書館友の会 講演会

## 「古地図から見えるもの」

講師：芳賀 啓 さん

5月22日(日)

午後1時30分～3時30分

小平市中央図書館3F視聴覚室 費用:無料

問い合わせ：090-1707-0860 伊藤

### ★会の現勢

2011年4月1日

現在

#### ●会員

(個人会員103名)

(団体会員3団体)

#### ●賛助会員

(個人41名)

(団体2団体)

会の活動はみなさまの会費・ご寄付で支えられています。新年度の振込用紙を同封しました。

よろしくお願ひします。

#### ●年会費

正会員(個人・団体)

五千元

賛助会員一口 二千元

(個人一口 団体五口以上)